

## 神岡鉱山史

飛騨の高原郷に所在する銀・鉛・亜鉛などの諸坑を総括する神岡鉱山は、日本の代表的な非鉄金属鉱山である。小規模ながら数多く散在し、そのときどきの事情によって休鉱と開鉱とをくりかえす独特の形をもった飛騨の鉱山、しかも半農半鉱ともいへば特異な稼行形態をもつ鉱山の歴史をのべたのが、ここに紹介する『神岡鉱山史』である。本書は、三井金属鉱業株式会社創立二十周年記念事業として企画されたものであって、京都大学名誉教授小葉田淳先生を総監修として編纂されたものである。

「本編」七二八頁、「史料編」二二〇頁におよぶ大冊であって、内容は第一編・近世の神岡鉱山、および第二編・三井組時代の神岡鉱山に分れている。

第一編は、江戸時代の神岡鉱山の歴史であるが、江戸時代に神岡の名称があったわ

けではない。明治になって神岡鉱山の鉱区に包括されるようになった諸鉱山のことである。飛騨における鉱山の開発は、十六世紀末から十七世紀にかけてのころの金・銀山の開発からはじまるらしい。一五八六年、秀吉によってこの地に封ぜられた金森長近によって、これらの金・銀山が開発されたようである。そのご一六九二年から幕領となり、高山郡代の支配するところとなったが、十七世紀半ばからは金・銀山は衰え、十八世紀前半ごろからは銅・鉛山が飛騨の鉱業を代表するようになっていった。

この銅・鉛山の盛衰が、地域社会の変遷と関連させてのべられてくる。その経営形態は、地山師ともよばれる稼人が、採掘の名義人あるいは責任者となり、その下で下稼人が実際の採掘にあたった。したがってこの稼人と下稼人との間に、対立関係が生ずるようになったが、その形は幕末までつづいたのである。

この時期のもう一つの問題は、一八五五年の高山銀絞吹所の創設である。この時期の鉱山が、銅・鉛の生産が主であったが、

それからの銀の分離回収すなわち灰吹銀の取収が、むしろ重視されていた。その灰吹銀増産のために、いろいろなことが試みられたが、この吹所の設置も、同様のことを目的としていた。この吹所は、郡代の直営ではなく、郡代の指名する請負人に経営せしめ、強く統制したので、直営と同じ効果をもった。この措置は、神岡諸坑にとって大きな刺戟となり、生産増をみせながら維新に至った。

第二編は、三井組が神岡諸坑の経営にのりだし、一八九一年三井鉱山合資会社創立までの時期をのべたものである。この時期になると史料も豊富になることもあって、鉱山の背景になる地域社会の変化も含めて詳細に叙述されるようになってくる。

明治に入って三井組が進出し、鉱山稼人をしだいに淘汰し、神岡諸坑の金山をその支配に組込んでいく姿がえがかれてくる。そしてさらに三井組が、政府の鉱山政策とむすびながら経営を近代化していく姿は、日本の鉱業近代化の典型を示すものであらう。

以上のべたように本書は、一鉢山の歴史として叙述されておりながら、地域社会の変遷との関連を重視し、さらに日本鉱業史のペースペクティブのなかに、しっかりと位置づけながらのべられている。また本書が、「史料編」が添えられていることは、本書の価値をさらに高めるものである。

(B5判 本編七二八頁 史料編二二〇頁  
一九七〇年一月 三井金属鉱業株式会社修  
史委員会編集発行)

(池田敬正 府立大阪社会事業短期大学教授)

## 宇治市史 1

宇治茶の名で茶の間にまで親しまれてきた宇治は、風光明媚な景勝の地ゆえに、早くから離宮や貴族の別業がおかれ、平等院や源氏物語宇治十帖に代表されるごとく、絢爛たる貴族文化が栄えたところであり、また地理的にも重要な位置をしめることから、宇治橋がかげられ、有名な断碑も残っている。さらに古く菟道稚郎子の伝承や、降って近世の黄檗山万福寺も、宇治にとつ

て逸することのできないものであろう。奈良盆地と京都盆地北半以遠とをつなぐ地点であった宇治は、それゆえ中央の動向と密接にからみあいつつ、各時代にわたって刻みこまれた幾多の伝承・史蹟等にめぐまれている。

かかる宇治に、これまで市史の類がなかったことは、いささか奇異の感なしとしなが、近年の急激な都市化の波は、当市においても深刻なものがああり、この転換期にあつて「急速な勢いで失われようとする過去の映像を整理・保存し、かつて宇治の歩んできた足どりを明らかにして、後世の人々に伝える責務が痛感され」(編者のことば)、昭和四五年から市史編纂事業が開始された。その後約三年をへて上梓されたのが、瀟洒な装訂をほどこし、随所に鮮明かつ適確な写真・図版・表をふんだんにもりこんだ本書である。副題を「古代の歴史と景観」とし、先史・古代を対象とするが、右の編纂意図は本巻にも明らかに貫かれ、「本編」に先だつて「序説」を配し、地理的・歴史的な概観、地質、地形、生物、気

候、産業、交通、人口問題、財政および都市計画の各方面にわたつて、「宇治市の現勢をじっくり眺める」(二五ページ)のために、現在同市がかかえている種々の問題を抉り出している。

「序説」につづく「本編」は、時代順に次の五つの章から構成されている。各章はそれぞれさらに節にわかれ、節ごとにその人を得てまことに興味ある論が展開されている。

### 序章 先史・古代の歴史と景観

#### 第一章 先史文化と古代の開発

#### 第二章 郡郷の成立と景観

#### 第三章 王朝貴族と別業

#### 第四章 院政期の庶民生活

まず序章では、当該時代の歴史的・地理的概観がこころみられ、「本編」の序をなすとともに、他方、総説的な位置をも占めている。

第一章では、古墳時代に至るまでの遺跡について詳述される。五世紀末の山背地方で十指に入る規模をもつ巨大な二子塚古墳や、著名な久津川古墳群とその被葬者の問